

〔講演会報告〕

アンステイチュ・フランセ「読書の秋 2021」

オンライン講演会

マリー・ンディアイを迎えて

マリー・ンディアイ

松浦 菜美子 訳

私は小説の最初の言葉を書き始める前に、何ヶ月もかけて、登場人物に思いを巡らせます。メモは取らないか、ほとんど取りません。もっぱら想像の中で、頭を使うのではなく、むしろ夢想しながら行います。それは仕事のものではなくて、あえて名付けるとすれば、一種の知的で、精神的で、夢幻的な散歩のようなものです。私は登場人物を形づくるにあたって、登場人物たちについて想像し、彼らのシルエットや彼らの苗字やファーストネームの周りを歩きまわります。私は自分の心に対して、できる限り繊細に姿をあらわすように命じます。あたかも、生成過程にある登場人物たちが、おびえさせたり、逃げられたりする危険を冒さずに、できるだけ近づいて心を通わせたい野生動物であるかのように、です。私は日常生活の様々なことをこなしながら、その一方で、登場人物たちを思い浮かべ、彼らの言葉に思いを巡らせます。数ヶ月にわたって、登場人物たちとともに生活し、彼らの輪郭がますますはっきりしてくると、登場人物の年齢や容姿、そして、当然ですが、自分が考えている物語における役割をすこしずつ特定していきます。私は、登場人物たちの子供時代について、たとえそれが小説の中でほとんど現れないとしても、明確にするようにしています。私には、登場人物たちがどんなタイプの子供だったのか、どんなフランスで、どんな社会的環境で育ったのか、知る必要があります。ですので、私には、フランス育ちではない登場人物を生み出すことはできないでしょ

う。私がよく知る唯一の子供時代はフランスの子供時代だからです。ただ『三人の逞しい女』のカディ・デンバには例外を設けました。カディ・デンバはセネガル人女性で、セネガル以外で暮らしたことはありません。この登場人物に関しては、言ってみれば、他に方法がなかったのです。カディ・デンバはアフリカ人である必要があったため、私は登場人物の子供時代を隅々まで想像するという自分のルールを破ったのです。カディ・デンバを造形するにあたり、私は感覚で捉えたり感じ取ったりする以上に、資料を集めたり視覚的に想像したりしなければなりません。私にとって、同時代の人物を書くということは、同じくとても重要なことです。私は、自分の全く知らない時代を生きた登場人物たちに生命を与えるということを考えるだけで、書きにくく感じてしまうでしょう。

登場人物の名前、そしておそらく特にファーストネームは、私が登場人物に与えようとする生命にとって必要不可欠なものです。登場人物のファーストネームは登場人物から離れることはありませんし、登場人物と一体となって、登場人物の人格に深い影響を与えています。ただ、私はこれまでに2回 (*La Cheffe, roman d'une cuisinière* と *La vengeance m'appartient* において) 主人公の女性にファーストネームを付けませんでした。つまり、この二作は先ほど私自身が述べたことに反しています。ただそれというもの、私にとって、この二作では、次のことを示すのが重要だったのです。すなわち、彼女たちには私生活よりも自分の就いた職業のほうが大事であり、幸福は彼女たちにとってそれほど重要なものではない、ということです。思うに、幸福が喚起されるためには、ファーストネームを経由する必要があるのです！

私の作品の登場人物たちは、自分たちの存在の正当性が危うくなるにつれて、心の中で自分の名前をますます繰り返すようになります。例えばロジー・カルブは、自分には存在する権利があるということをずっと確信できず、自分が実際に存在していることすら確信が持てないでいます。それでロジー・カルブは自分の名前をお祈りのように何度も唱え、名前の音節の響きを混乱した自分の心にぴったり一致させようとするのです。

カディ・デンバは、ロジー・カルブとは反対に、自分の存在やその価値を全く疑っていません。カディ・デンバは、いわばほとんど無力な存在であるにもかかわらず、自分が地上にあることの権利を決して問い直したりはしません。それゆえにカディ・デンバは客観的に見てますます悪化していく状況の只中でさえ、決して屈辱を感じないのです。カディ・デンバの名前は作品の中である種の強迫観念のように繰り返されますが、それはむしろ、彼女の静かな誇りを伝えるものなのです。彼女が抱いているのは、彼女が自分自身であり、ただ単に自分自身であるとともに、かけがえのない個人であるという決して損なわれることのない誇りであり、他のどんな物事よりもかけがえのないこの事実に対する誇りなのです。

私はいつも、自分の登場人物たちを、自分の知る社会環境に位置づけるようにしています。自分の知る社会環境というのは、自分がよく関わった環境、例えば、私の母は教師でしたので、教育に関わる社会環境だとか、それから、その社会環境に身を置く人たちと付き合いがあったとか、そういう理由で知っている社会環境のことです。私はフランスで「社会階級の転向者 (transfuges de classe)」と呼ばれる人たちの問題に敏感なのですが、「社会階級の転向者」は自分の親よりも社会的に上昇した、親よりも社会的に高い地位についた人たちのことを指します。彼らは、自分の親の夢、すなわち社会的地位向上の夢を、それが親にはっきり示されたものであれ、親の隠れた願望であれ、実現していく一方で、ある辛い事実と直面せざるをえないのです。すなわち、彼らはもう自分の両親の様々な関心事や心配事と同じレベルにはいないということ、さらに、自分の言葉遣いや語彙を親の表現に合わせないといけないということです。要するに、彼らは自分の親のそばにいるとき、ある役柄を演じなければならないのです。親が彼らの心にとって大事な存在であることに変わりはありませんが、しかしながら彼らは知的にも文化的にも決定的に親から遠ざかってしまっているのです。私自身は「社会階級の転向者」ではありませんが、私の母はその一人です。母は家族で一人だけ大学^バ入学資格試験^カに合格し高等教育を受けました。母の置かれた状況が、多かれ少なかれ意識的に、例えば弁護士シユ

ザンヌという登場人物を生み出したように思います。

私の作家としての経歴は、子供時代、熱に浮かされたようにワープロのキーボードをタイプし、物語の中をどんどん進んでいきたいという気持ちにいつも自分の指が追いつかなかった頃に始まり、そして現在に至ります。その間、必然的にいくつかの語りの技法を身につけました。作家としての経歴の中で、私は有り余る「思考 (pensée)」を抑えつける必要はないという感覚を常に持っていました。そこには矛盾があるかもしれないということを私は理解しています。私たちは自分のなかで「思考」が膨れ上がるのに抗う必要はないということ、どうすれば考えることができるのでしょうか？ただそれは可能であるように思えるのです。私はこのように比較的純朴である理由を自分が高等教育の学位を持っていない事実にいつも結びつけてきました（本当の純朴さというのは、自分が純朴かどうか自分ではわからないものだということは、理解しているのですが）。私は間違っているのかもしれませんが、私にはわかりません。ただ、私は高校2年生の頃すでに、テキスト研究というものを前に反発心を持っていました。私は読書に情熱を傾けていましたし、学校で出されるテキストを読むことに対してもそうでした。しかしそれらのテキストの構造を分析して記述したり、テキストの意味を深く掘り下げたりすることは、自分が密かに情熱を傾けている、自分にとって切迫した、運命的な活動（つまり書くこと）にとって、危険であるように思われたのです。私は過ごし方を強制されていない、単に生活するための時間のすべてを、「書く」という活動のために捧げていました。私の生活は、一見本当の生活に見える生活と並行して進んでいたのです。ご理解いただきたいのは、私はここで、おそらく特殊な、自分のケースについて話しているということです。私は作家たちを扱った様々なエッセイを読みますし、文学研究の成果を辿ることができるというのは私には素晴らしいことのように思えます。ただ、私は（ほんのわずかな、本能という方がむしろ良いかもしれない）ある直感を持っています。それは自分の創造的な熱情の根本的な部分を守るために私が維持している無知に対して、それらは害があるかもしれないという直感です。

それは私がいつも確信していたことですが、私はあまりそれをはっきり説明しようとはしてきませんでした。というのも、そこに矛盾があるかもしれないからです。私はここで実際のところ小説のこゝろしか述べていません。他の文学形式、例えば小説に近いものとしては短編が挙げられますが、それらに対しては、先ほど述べたような微かな「愚かさ (bêtise)」をもって取り組むのは難しいように思われます——それはおそらく、ある執筆技法を使う必要がでてくるやいなや、愚かさをうるさく追い立て、いらいらしている知性を前に、愚かさが消えてしまうからでしょう。私はそれによって何を言いたいのか？ 私は実際、「愚かさ (bêtise)」よりもむしろ「馬鹿さ (idiotie)」について話すべきなのでしょう。その理由はまさに、「bêtise」という言葉があまりにもフローベールを連想させるからです——私はドストエフスキーにおけるムイシュキン公爵の聖人のような純粹無垢さとして「idiotie」について話すべきなのでしょう。〔私が言いたいのは〕登場人物に対して、それが愚かな人物であっても、(フローベールとは反対に) 幸福の機会を与えること。それはおそらく、愚か者の登場人物を生み出さないということです。それから、そう、ある種の純真さをもって自分の小説のことを考える——つまり、自分自身に対して、これまで何も読まなかった振りをしないこと。そこに至るためには逆にたくさん読んでいなければなりませんから。ただその一方で、自分の登場人物たちよりも賢かったり知的であったりしようとしなくていいこと——あるいは雑多なものの寄せ集めである小説の不純な形式のことをある種の純真さをもって考えること。尊大な態度を排して小説の形式を見つめ、小説の形式が持ちうる素朴で原初的なもののレベルに自分を合わせる術を知ること。意味よりもむしろ対象の美しさや、その対象が残す様々な印象や、そしておそらく何よりも、その対象が引き起こす思索のことを思うこと、なのです。

『復讐は私のすること』

この小説を構成する物語の一つに幼い我が子を殺害した母親に関する物語があります。その女性は、自らの意思で、幼い我が子三人を浴槽に漬け溺死させ

ます。この話は、小説の前年に執筆した脚本の仕事から、直接想を得ています。その脚本は10年ほど前にフランスで実際にあった三面記事的事件をもとにしています。11月のある朝、北フランスにあるベルクという都市の海岸で、漁師たちが生後16ヶ月の女児の遺体を発見します。死因は溺死でした。その赤ちゃんは潮が引いた後に砂浜に打ち上げられていたのです。10日後に捜査官たちは母親を捜し出します。その母親が子供を砂浜に放置し、海が子供をさらって溺れさせるように意図したのです。私はこの女性の裁判を傍聴しました。何日も何十時間も弁論の言葉が費やされましたが、その後でさえ謎は謎のままでした。この母親は子供の育児を完璧にこなし、子供を可愛がり大事にしていました。この愛情深い母親はなぜ我が子を殺害する決意をしたのでしょうか？

この小説を構成する別の物語には、ボルドーで働く女性弁護士シュザンヌが登場します。幼い我が子を殺した母親の夫が妻の弁護を依頼しに、弁護士シュザンヌのもとを訪れます。弁護士シュザンヌはこの男性に、自分がまだ子供だった30年ほど前、自分の人生に決定的な影響を与えたある青年の姿を認めます。しかし弁護士シュザンヌは確信が持てません。そこで彼女はこの男性が自分がそうだと思う人物なのかどうかを確かめるべく、自分自身の記憶と、何か知っているはずの自分の母親の記憶を通して、調べを進めていくのです。

*

解説・講演会報告

松 浦 菜美子

本稿は、フランスの作家マリー・ンディアイが、2021年11月16日に関西学院大学文学部フランス文学フランス語学専修とアンステイチュ・フランセ共催のオンライン講演会「マリー・ンディアイを迎えて」で行った講演の翻訳で

ある。ここでは、講演会主催者の一人として本講演の枠組みやテーマを紹介するとともに、当日の様子を報告したい。

本学では2014年以降、毎年、アンスティチュ・フランセ主催の文化イベント「読書の秋」の一環として、フランス語圏の作家による講演会を開催している。本学とアンスティチュ・フランセとのコラボレーションは今年で8回目となるが、前回と同様に今回もコロナ禍という特殊な状況のもと、Zoom ウェビナーによるオンライン開催となった⁽¹⁾。講演会の参加者がそれぞれ一人で端末を前にしている姿を想像すると、主催者の一人としてどこかさびしい気がしてしまうが、その一方で、後述するように、本講演会では作家と聴衆とのあいだに充実した質疑応答がなされ、共通の精神的・文化的な場が立ち現れたのを実感することができた。地理的な拘束を受けないことで、200名近くの方にご参加いただけたのも幸いであった。このような特殊な状況のもとで本講演会を無事に開催できたのは、ひとえにアンスティチュ・フランセの関係者の方々、準備や当日の運営にご協力いただいた本学の久保昭博教授ならびにフランス文学フランス語学専修のスタッフ、参加者の方々のおかげである。そして朝早くから日本の聴衆に向けて語りかけてくださったマリー・ンディアイ氏に感謝を申し上げたい。

*

1967年にフランスのピティヴィエに生まれたマリー・ンディアイは10代の頃から「書くこと」を始め、17歳で作家としてデビューする。その後、現在に至るまで途切れることなくコンスタントに執筆活動を続け、現在では演劇作品や子供向けの童話を含めて、数多くの文学作品を刊行。2001年に小説『ロギー・カルプ』でフェミナ賞を、2009年に『三人の逞しい女』でゴンクール賞を受賞し、今日では現代フランス文学を代表する作家の一人とみなされている⁽²⁾。

小説だけでなく演劇や童話も手掛けてきたマリー・ンディアイは、ジャンル

のみならず作風においても多様である。そのため、ンディアイ文学の特徴を簡潔に述べるのは難しいが、本講演会に関係する点に限って言えば、夫婦や親子など現代社会の身近な人間関係を題材にする点や、しばしばプルス特的とも評される文学性の高い独特の文体、とくに登場人物の内面や身体感覚を読者に追体験させるようなある種のリアリティといった特徴が挙げられる。リアリズムと幻想が共存する作風も指摘されるところである⁽³⁾。

講演会ではンディアイ文学について一つのテーマを設定するのではなく、いくつかのトピックをゆるやかに取り上げるというかたちをとった。ンディアイ氏の講演は、講演会の司会・通訳を務めた松浦が事前にンディアイ氏に伝えた質問やトピックに沿うかたちで構成されている。事前にお訊きしたことの一つが登場人物についてである。ンディアイ作品では、個性的で、ある意味では非常に現代的な人物たちが描かれるが、これらの登場人物はどのように着想され、どのように造形されているのだろうか。また、幼い頃から「読むこと」に親しみ、「書くこと」に没頭してきたンディアイ氏には、「読むこと」と「書くこと」の関係をどのように捉えているのか、という問いかけも行っていった。ンディアイ氏には、文学創造に関わるこれらの問いについて、これまでの作家人生やその中で培ってきた創作態度を踏まえながらお話いただいた。最後に最新作 *La vengeance m'appartient* (『復讐は私のすること』、未訳⁽⁴⁾) の紹介もされている。

ンディアイ氏は講演の中でいくつかの作品に言及する予定だったため、講演会ではイントロダクションとして聴衆向けに作品紹介を行った。ここでも講演内容の理解の一助とすべく、講演で中心的に取り上げられた作品のあらすじを記しておく⁽⁵⁾。なお括弧内の西暦は原書の刊行年である。

『ロジー・カルプ』(2001年)

ロジー・カルプ(本名ローズ=マリー・カルプ)は幼子ティティと妊娠した大きなお腹を抱え、兄ラザールが住むグアドループに降り立つ。パリでの学業に失敗した後、両親に見捨てられ、パリ郊外のホテルで働いていたロジーはい

まや一銭もなく兄しか頼る人がいない。しかし迎えに来たのはラザールではなく、ラザールの知人ラグランだった。カルプ家の家族同士の奇妙な距離感、幼少期の記憶やトラウマ、物語の奇妙な展開が、ロージーやラグランの意識と感覚を通して描かれる。

『三人の逞しい女』（2009年）

I. 弁護士ノラは、母を捨て故郷アフリカに帰り長年音沙汰のなかった父に頼まれ、パリから彼の暮らすアフリカに赴く。事業に成功し裕福だった父は今や落ちぶれた生活を送り、父に引き取られていた弟は殺人の罪で逮捕されていた。ノラは弟の弁護を任されるのだが彼らに一体何が起きたのか。

II. 元高校教師で今は地方のキッチン販売会社に勤めるルディ・デスカスはアフリカで出会った妻ファンタと気まずい関係にある。ルディの意識、感覚、回想を通じて、二人の出会いや関係の悪化、ルディの来し方が明らかになる。

III. 結婚後3年で夫を亡くしたカディ・デンバは同居していた義理の家族に追い出され、見知らぬ男に連れて行かれる。その先にいたのはアフリカからヨーロッパに渡ることを試みる人々の集団だった。パスポートどころか十分なお金も持ち物もない彼女は、いとこのファンタがいるというフランスにたどり着くことができるのか。

La vengeance m'appartient（2020年）

ボルドーに事務所を構えたばかりの弁護士シュザンヌ（M^e Susanne）のもとを、ある日ジル・プランシポーを名乗る男性が訪れ、妻マリリンの弁護を依頼する。マリリンは我が子三人を殺害。そのショッキングなニュースは新聞をにぎわせていた。一方、弁護士シュザンヌはジル・プランシポーが子供の頃に出会った少年なのではないかと疑念を抱く。彼との間に何かがあった気がするのだが何なのかは思い出せない。ジル・プランシポーは彼女のことを覚えていないようだが、金持ちの彼が有名なこの事件の弁護を無名の弁護士シュザンヌに依頼するとも思えない。ジル・プランシポーは一体誰なのか、過去に何があつ

たのか、この事件をどう捉えたらよいのか——弁護士シュザンヌの視点を通してこれらの謎が展開していく。他方で、弁護士シュザンヌはモーリシャス島出身の家政婦シャロンの不法滞在問題を解決すべくシャロンに働きかけるがシャロンは動こうとしない。頑なに心を閉ざすシャロンとの気づまりな関係も弁護士シュザンヌを苦しめる。

*

講演会ではンディアアイ氏の講演につづき、50分ほど質疑応答の時間を設けた。前半は司会・通訳の松浦が質問し、対話形式で進めた。ここでの対話は、「読むこと」と「書くこと」の関係や登場人物の造形をめぐる展開された。ンディアアイ氏の講演と対になる部分であるため、そのときの対話を以下に記録しておきたい。

—— あなたが持っていた直感や本能、すなわち、文学研究や学校でのテキスト分析があなたの作家としての書く行為に対して「害がある」かもしれないという直感ないし本能について話していただきましたが、とても興味深く思いました。「読むこと」に二つの種類——教育的・学術的な読書と文学創造などの「書くこと」と密接に結びついた読書——があるとして、あなたは作家としての経歴を始められた頃から、どのような「読むこと」を大事にしてきたのでしょうか？読書をし「読むこと」に身を委ねているとき、何があなたのうちで起きているのでしょうか？（「書くこと」と結びついた）「読むこと」というこの不思議な経験をどのように表現することができるのでしょうか？

ンディアアイ 私に最も深く影響を与えたのはプルーストであり彼の『失われた時を求めて』だと思います。『失われた時を求めて』には16歳か17歳の頃に出会いました。それ以降、ずっと繰り返し読んできました。プルーストは私の作家としての仕事、言ってみれば私の人生に、35年以上いつも付き添ってくれています。何人かの作家は私の心にとってとても大切で、プルーストよりも

読書の喜びを与えてくれますが、プルーストの作品は非常な豊かさを持っているので、死ぬまでにすべてを探究し尽くすことは決してできないという印象を持っています。プルーストが作品に注ぎ込むことに成功した様々な比類ない豊かさを一周りするためには、言ってみれば3回分の人生が必要でしょう。それは、やはり比較的若くして亡くなったプルーストの信じられないような天才の印でもあります。

—— あなたの作品にはとても独特で驚きを引き起こすような文体が見られます。例えば、非常に洗練された文章。同じ一つのモチーフ、一つの表現、一つの文章といった、様々な要素の繰り返しから生じるリズムなどです。それに、複雑に入り組んだ繊細な自由間接話法も見られます。このような文体はどこから生じてくるのでしょうか？あなたには文学のモデル、例えば着想を与えるモデルや理想となる作品や作家はいる、あるいはいたのでしょうか？

ンディアイ とても若かった頃、これまでよく述べてきたように、プルーストにたくさん刺激を受けていました。ただそれだけでなく、翻訳で読んだアメリカ作家のヘンリー・ジェイムズにも刺激を受けました。私には作家が用いた言語で読むことのできる外国作家はいません。それから、カフカも挙げられます。カフカは、文体に対してというよりも、カフカが生み出した幻想的な世界に対してでした。それから、私がよく読んだのはアメリカ作家たちです。例えばウィリアム・フォークナー、彼は私の最も愛する作家の一人でありつづけています。それからとくに、存命の作家ジョイス・キャロル・オーツの文体や、いわば世界観からも、多くの刺激を受けました。

フランス語でしか読まない私としては、この場を借りて、翻訳家たちに敬意の念を表したいと思います。彼ら彼女らの仕事がなければ、私にとってこれほど大事な作家たちに出会うことはできなかったでしょう。

—— あなたの登場人物たちはとても個性的で独特であるように思いました。しかしそれと同時に、彼らは非常にリアルなので私たちの現代社会の中で実際に生きているように思えてきます。このような真実味やリアリティといったものは、おそらく、一つには登場人物のいる社会環境をいかに構築するかという

ところから来ていると思います。この点は先ほど私たちに話してくださったところですが。また他方で、このリアリティは登場人物の身体や身体感覚の描写からも生じているように感じました。例えば、『三人の逞しい女』のカディ・デンバは負傷し、その後ずっと脚に痛みを抱えています。また別の例として最新作の主人公であるシュザンヌ弁護士が挙げられます。シュザンヌ弁護士は転んで怪我し出血しますが、もう一人の主要登場人物である、依頼人ジル・ブランシポーとの面談のときにも出血しています。ほかにも『三人の逞しい女』のルディ・デスカスに襲い掛かった激しい痒みも挙げられるでしょう。身体はそれを所有する人物に逆らい、登場人物を困惑させ苦しめているように見えます。登場人物の人格とは独立して彼らの身体が存在しているようです。あなたは作品の中で、なぜこのように繰り返し登場人物の身体を描写するのでしょうか？このような身体描写にどのような位置づけを与えているのでしょうか？身体や身体感覚に対するあなたの興味はどこからくるのでしょうか？

ンディアイ 登場人物の身体描写において関心のあること。登場人物の身体描写はそもそもいつも網羅的描写ではなく、自分にとって関心のある要素や身体〔の描写〕に過ぎません。身体は登場人物が感じることを表現する、単にそういうことです。例えば、シュザンヌ弁護士はあれこれ疑いながらうまく行かないのですが、その彼女は転んでしまいます。この転倒は言ってみれば彼女を彼女自身に立ち返らせることになり、それによって、彼女は身体がまだ傷ついてなかった頃は理解することのなかったいくつかのことを理解するようになります。身体はそもそも一つの現実的側面にほかなりません。私たちは皆これまでに、自分の身体と精神を分離することはできないという経験をしたことがあると思います。精神が不調な時は身体もまた調子が悪く、反対に、身体の調子が悪い時は精神も調子が出ないという経験です。

—— これが最後の質問です。最新作 *La vengeance m'appartient* のタイトルはとても不思議で謎めています。このタイトルは何を意味しているのでしょうか？「復讐」とは何で、その復讐は誰「にある／帰属する」のでしょうか？

ンディアイ 最初に明確にしておきたいのですが、私はこの一文を『旧約聖

書』の中で見つけました。そこでは、神が人間に語りかけ彼らにこう言うのです。「お前たち同士で互いに復讐をしてはならない、復讐は私のすることだから⁽⁶⁾」と。私の作品では、複数の登場人物がこの一文を言ってもおかしくないのですが、ただ、タイトルを選んだ時、私にとってそのタイトルはとくに意味を担っていませんでした。それは単なる一つのタイトルであって、他のタイトルもあり得ましたし、それほど重要ではありません。私にとって、タイトルで何よりも大事なものは、その音楽性です。タイトルが読者の精神に生じさせうるイメージです。いずれにせよ、私のタイトルと私が語る物語との間には必ずしも一つの意味や直接的なつながりがあるわけではないのです。

*

質疑応答の後半は聴衆からの質問にあてられた。具体的には、Zoom ウェビナーの Q&A にテキスト形式で寄せられた質問を、松浦が代わりにンディアイ氏に投げかけるというかたちで進められた。聴衆からは質疑応答の時間内に収まりきれないほどたくさんの質問が寄せられ、マリー・ンディアイ氏に対する関心の高さが窺われた。ここでは、講演のトピックに関わるやりとりを一部紹介したい。

—— 登場人物を造形する際に「思い巡らす」と仰っていましたが、それは登場人物が自分に憑依するという感じなのでしょうか。それとも、客観的視点にたつて、遍在的な語り手 (le narrateur omniprésent) のように、登場人物を上から眺め俯瞰するのでしょうか。

ンディアイ 登場人物に自分を届かせる際、私にとって非常に大事なものは、私が本当に彼ら自身であり、彼らの精神や心の中にいるということです。私は彼らを距離を置いて見るということとはしません。彼らが私の中のように、私は彼らの中にいます。実際、彼らと自分のあいだにもはや違いはないという感じがします。登場人物が私と全く似ていない人物、たとえば男性や子供であつ

でも、問題にはなりません。登場人物たちは私と不可分で一体になっています。私は彼らを外的な視点から見るということはありません。

—— 登場人物を造形するときに彼らにイライラしたり嫌いになったりすることはありますか？

ンディアイ それはありません。私は登場人物たちを近しく感じるというやり方でしか、どのみち彼らを造形することはできません。たとえそれが、ややネガティブな人物であっても、です。私は彼らにイライラしたり、彼らをお愛さなかったりということは絶対にできないのです。

—— 『三人の逞しい女』についての質問です。『三人の逞しい女』にはどのような執筆動機があったのですか？ 何が執筆を促したのでしょうか？

ンディアイ 私の記憶では、三つ目の物語が、この本を書きたいという私の気持ちの最初にありました。すなわちカディ・デンバの物語です。執筆は2007年から2009年頃ですが、その頃フランスでは、移民が話題になることはほとんどありませんでした。今日ではとても広く知られたテーマなので、今ならこの物語を書くことはしないでしょう、移民が新聞や書籍でよく話題になっているときです。ただ、当時は本当にそういうことはめったにありませんでした。私は、このような人たちがヨーロッパを目指してたどる道のりがどれだけ英雄的行為に属するものであるかを示したかったのです。私はこの可哀想なカディ・デンバを英雄にしたいと思いましたが、このような横断の旅にどれだけ勇気や勇敢さがあるのかを示したかったのです。

—— 『三人の逞しい女』のタイトルに「逞しい」とありますが、登場人物の行為なり性格なり、どのような側面が「逞しい」のでしょうか？

ンディアイ それは全く社会的なものではありません。描かれているのは、自分のいる社会の中でいかなる力も持たない女性たちです。彼女たちの逞しさは、自らの存在価値を決して疑わない姿にあるものとして理解するのがよいと思います。彼女たちはお金もなにも全くないときでさえ、自分たちの生が他のどんなものと比べてもそれらと変わらない価値があるということを、内心いつも確信しているのです。

——『三人の逞しい女』にはルディ・デスカスという男性が登場しますが、あなたはどのように男性の登場人物を造形するのですか？

ンディアイ 男性の登場人物も女性の登場人物と同じ方法で書きます。実際、私にとって登場人物を生み出すことにおいてさほど違いはないのです。男性、女性、子供にしても、です。登場人物を想像し、執筆する際、私は自分が誰かということをとにかく忘れようとします。自分が女性であるとか、何歳であるとか、フランス人であるとか等々を忘れるよう努めます。私は男性や子供にでもなろうとします。それが犬であっても（笑）。誰でもです。なので、男性の登場人物を生み出すことも、私にとって同じなのです。私は男性ではありませんが、それは重要ではないのです。

*

質疑応答ではこのほかにも、日本との関わりについて問う質問も寄せられた。例えば、日本文学に関して、ンディアイ氏はかつて『源氏物語』にその成立年代の早さも含め、感銘を受けたと述べられた。まだいろいろとお話を伺ってみたいという頃に終了時間を迎えてしまったのは残念であったが、後日そのような感想を「フランス文学史」の受講生からもらったことは主催者として大変うれしいことであった。

講演会は在京都フランス総領事館のジュール・イルマン総領事による閉会の辞で幕を閉じた。関係者の方々や講演会の参加者、そして文学創造の豊かな世界を垣間見せてくれたマリー・ンディアイ氏に改めてお礼を申し上げたい。

注

- (1) 前回の2020年の講演会については次の講演会報告を参照のこと。久保昭博「アンスティチュ・フランセ「読書の秋」オンライン講演会 ローラン・ビネを迎えて——フィクションと歴史叙述——」、『年報・フランス研究』、関西学院大学フランス文学研究室、第54号、2020年、35-43頁。
- (2) 日本では現在、次に挙げる6作品の翻訳が刊行されている。

マリー・ンディアアイ『みんな友だち』, 笠間直穂子訳, インスクリプト, 2006年。
——『心ふさがれて』笠間直穂子訳, インスクリプト, 2008年。
——『ねがいごと』, 笠間直穂子訳, 駿河台出版社, 2008年。
——『ロジー・カルプ』, 小野正嗣訳, 早川書房, 2010年。
——『三人の逞しい女』, 小野正嗣訳, 早川書房, 2012年。
——『パパも食べなきゃ』, 根岸徹郎訳, れんが書房新社, 2013年。

- (3) ンディアアイ文学の全体像や特徴については, 初邦訳『みんな友だち』の巻末の笠間直穂子氏による解説「マリー・ンディアアイの世界」を参照のこと。前掲書, 218-251頁。
- (4) Marie NDiaye, *La vengeance m'appartient*, Gallimard, 2020.
- (5) 『ロジー・カルプ』および『三人の逞しい女』の作品紹介にあたり, 両作品とともに小野正嗣氏による「訳者あとがき」を参考にした。前掲書, 2010年, 401-406頁; 前掲書, 2012年, 333-339頁。
- (6) 「復讐は私のもの」という神の言葉について, ンディアアイ氏は『旧約聖書』を挙げているが, 『新約聖書』の「ローマ人への手紙」(12章19節)や「ヘブライ人への手紙」(10章30節)の一節がとくに知られている。同じ聖書の言葉は佐木隆三の小説『復讐するは我にあり』のタイトルにもなっている(同小説を映画化した今村昌平監督作品も同じタイトルである)。この点については質疑応答の際, 立教大学教授の澤田直先生よりご指摘いただいた。

(関西学院大学文学部助教)